

令和4年度病害虫発生予報第4号

令和4年7月1日
山梨県病害虫防除所

今月の天気予報

6月30日気象庁発表、1か月予報による関東甲信地方の向こう1か月（予報期間7月2日～8月1日）の天気は次のとおりです。

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間のはじめは気温がかなり高くなる見込みです。高気圧に覆われやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多い見込みです。

I 特に注意が必要な病害虫

【果樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	晩腐病	—	平年並～ やや多い	<ul style="list-style-type: none">○昨年、発生量がやや多く、結果母枝等での越冬病原菌は多いとみられる。○一次感染期の5月後半から6月前半の降水量は平年並から少なかった。○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。□病原菌は雨水により飛散するため、落花期以降、降雨が続く場合は感染が助長される。□仕上げのカサかけ、袋かけは出来るだけ早期に行う。摘粒作業が遅れている場合は、先にカサをかけてから摘粒を行う。□着色期以降、発病果粒は伝染源になるため、見つけ次第除去する。□果粉の溶脱や果粒の汚染に注意し、防除暦に従い薬剤防除を徹底する。ブドウ晩腐病防除マニュアル（令和3年12月発行）、令和4年度病害虫防除所情報第2号「ブドウ晩腐病の防除対策について」 https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/69805589938.htmlを参考に防除対策を行う。

II 各作物の病害虫発生予報

【果樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	べと病	—	平年並	<ul style="list-style-type: none">○6月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。□袋かけ、カサかけが済み次第、ボルドー液等での予防散布を実施する。併せて新梢管理（摘心など）を徹底し、副梢等に薬液が付着するように棚上散布も行う。□発病した葉や果房は伝染源になるため、見つけ次第除去する。

【果樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
ブドウ	チャノキイロ アザミウマ	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○ 6月下旬現在、黄色粘着トラップ（南アルプス市）への誘殺数は少ない。 ○ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。 □ 果粉の溶脱や果粒の汚染に注意し、防除暦に従い薬剤防除を徹底する。散布後はできるだけ早く袋かけを行う。カサのみの園では、定期的な薬剤防除を実施する。 □ 新梢先端への寄生が多いので、新梢管理（摘心など）を実施し、薬剤が十分かかるよう棚上からもていねいに散布する。
	クビアカ スカシバ	—	平年並 ～ やや多い	<ul style="list-style-type: none"> ○ 6月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市、甲州市）への誘殺数はやや多い。 □ 虫糞やヤニを目安に早期発見に努め、粗皮下に食入した幼虫を捕殺する。 □ カサかけ・袋かけ後にサムコルフロアブル10 5,000倍を主幹部や主枝など太枝によくかかるように散布する。ただし、周囲にデラウェアや立木類（かきを除く）がない場合は、パダンS G水溶剤1,500倍を用いてもよい。
モモ	せん孔 細菌病	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○ 6月中旬現在、一部の巡回ほ場では発病葉を確認しているが、発病葉率は昨年より低く、果実被害は少ない。 ○ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。 □ 春型枝病斑（スプリングキャンカー）の見られる枝や発病葉および果実は速やかに除去する。 □ 発病葉が目立つ新梢では、夏型枝病斑（サマーキャンカー）も見られ始めるので、剪除を徹底する。 □ モモせん孔細菌病防除マニュアル（令和3年12月発行）を参考に防除対策を徹底する。
	灰星病	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○ 6月下旬現在、現地における発生量は平年並である。 ○ 開花期の花腐れの発生量は少なかった。 ○ 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである。 □ 除袋後（着色始め）の防除を徹底する。収穫期に雨が多い場合や収穫期間が長引く場合は、追加散布を行う。 □ 発病果は伝染源となるため、見つけ次第土中に埋めるなど適切に処分する。

※クビアカスカシバのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/92111468716.html>

【果樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
モモ	モモンクイガ	—	平年並	<p>○6月下旬現在、フェロモントラップ（韮崎市、山梨市、笛吹市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。</p> <p>□7月中旬～8月中旬が第1世代成虫の発生盛期にあたるため防除を徹底する。特に海外輸出を行う地域では、地域の発生状況にも注意し防除を徹底する。</p> <p>□除袋後に雨が多い場合や収穫期間が長引く場合は、追加散布を行う。</p>
	ミカンキイロアザミウマ	—	平年並	<p>○6月下旬現在、桃色粘着トラップ（韮崎市）への誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。</p> <p>□除袋直後（着色始め）の防除を徹底する。</p> <p>□雑草が発生源になるため、除袋前の除草を徹底する。</p>
	モモノゴマダラノメイガ	—	平年並	<p>○6月下旬現在、フェロモントラップ（韮崎市、山梨市、笛吹市）における誘殺数は平年並からやや少ない。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。</p> <p>□7月下旬から第1世代成虫の発生時期にあたり、幼虫による食害も心配されるため、特に晩生種以降の品種では防除を徹底する。</p> <p>□除袋後に雨が多い場合や収穫期間が長引く場合は、追加散布を行う。</p>
	モモハモグリガ	—	平年並	<p>○6月下旬現在、フェロモントラップ（韮崎市、山梨市、笛吹市）への誘殺数は、地域による差があるが平年並からやや多い。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。</p> <p>□本種は年間の発生回数が多く、密度の上昇も急激なため、発生状況に注意し、薬剤防除を行う。</p> <p>□収穫が終わった品種でも発生状況に注意し、防除を徹底する。</p>
	リンゴヨカクモシハマキ	—	平年並	<p>○6月下旬、フェロモントラップ（笛吹市）への成虫誘殺数は平年並であるが、一部地域で多い。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。</p> <p>□7月中下旬は第2世代幼虫の発生時期にあたり、果実への被害も多くなる恐れがあるため防除を徹底する。</p>

※モモンクイガ、モモノゴマダラノメイガ他のトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/92111468716.html>

【果樹】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
スモモ	灰星病	—	平年並	<p>○6月下旬現在、現地における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである。</p> <p>□収穫前の降雨により多発することがあるので予防散布を徹底する。なお、収穫期に雨が多い場合や収穫期間が長引く場合は果粉の溶脱に注意して追加散布を行う。</p> <p>□発病果は伝染源となるため、見つけ次第土中に埋めるなど適切に処分する。</p>
	スモヒメシンクイ	—	平年並	<p>○6月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市）への第1世代成虫の誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。</p> <p>□第2世代成虫の飛来が増える7月中旬からの防除を徹底する。</p> <p>□収穫期に雨が多い場合や収穫期間が長引く場合は、果粉の溶脱に注意し追加散布を行う。</p> <p>□被害果は見つけ次第土中に埋めるなど適切に処分する。</p>
果樹全般	果樹カメムシ類	—	平年並 ～ やや多い	<p>○6月下旬現在、フェロモントラップ（南アルプス市、甲州市）への誘殺数は平年並からやや多い。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。</p> <p>□果樹カメムシ類は山間部から果樹園へ飛来するので、夕方～夜間及び早朝に園を見回り発生状況を確認する。</p> <p>□飛来量は地域やほ場によって差があるので、発生状況に応じて地域ごとに一斉防除を行う。</p>

※スモモヒメシンクイ、果樹カメムシ類のトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/92111468716.html>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
夏秋キュウリ	べと病	平年並	平年並	<p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。</p> <p>□予防散布に努める。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。</p> <p>□多湿条件で多発するため、誘引等により通風をよくするとともに、排水をよくして過湿を避ける。</p>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
夏 秋 ナス	オオタバコガ	—	平年並 ～ やや多い	<ul style="list-style-type: none"> ○6月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○6月下旬現在、フェロモントラップ(甲府市、笛吹市)の誘殺数は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。 □6月下旬から7月中旬が第一世代成虫の発生盛期にあたる。成虫の発生後は産卵と幼虫が見られるため、幼虫の食害痕や虫糞を目安に早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
	ハダニ類	—	やや多い	<ul style="list-style-type: none"> ○6月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。 □葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
	アザミウマ類	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○6月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □ほ場周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。
	ハスモンヨトウ	—	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○6月下旬現在、フェロモントラップ(甲府市、笛吹市)の誘殺数は平年並からやや少ない。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。 □作業の際にはほ場内をよく観察し、卵塊やふ化後分散する前の若齢幼虫を見つけ次第捕殺する。 □老齢幼虫には薬剤の効果が高いので、発生初期の防除に重点をおく。
キャベツ	黒腐病	平年並	平年並	<ul style="list-style-type: none"> ○6月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量は、平年並か少ない見込みである。 □大雨、台風の後には発生が多いため、防除を徹底する。 □アブラナ科野菜の連作を避ける。 □耐病性品種を用いる。 □予防散布を徹底する。 □収穫後の残さは丁寧にかたづけ、焼却処分する。

※オオタバコガ、ハスモンヨトウのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【野菜】

作物	病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
キャベツ	菌核病	平年並	平年並	<p>○6月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量は、平年並か少ない見込みである。</p> <p>□曇雨天が続くと発生が多いため、防除を徹底する。</p> <p>□予防散布を徹底する。</p> <p>□発病株は早期に除去する。</p>
	コナガ	—	やや多い	<p>○6月下旬現在、フェロモントラップ（鳴沢村）の誘殺数は平年並からやや多い。</p> <p>○6月下旬現在、キャベツ巡回ほ場（鳴沢村）における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。</p> <p>□薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p> <p>□鳴沢地域においては、フェニックス顆粒水和剤、プレバソンフロアブル5、マッチ乳剤、ハチハチ乳剤、パダンSG水溶剤に対する感受性の低下したコナガが認められたため、異なる系統のローテーション散布を行う。</p>

※コナガのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【野菜全般】

病害虫名	予想発生時期	予想発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
うどんこ病	—	平年並	<p>○6月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みである。</p> <p>□早期発見に努め、発病した葉、花、果実は除去してほ場外に出し、処分する。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。</p>
オオタバコガ	—	平年並 ～ やや多い	<p>○6月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○6月下旬現在、夏秋ナス（甲府市、笛吹市）ほ場のフェロモントラップ誘殺数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。</p> <p>□6月下旬から7月中旬が第一世代成虫の発生盛期にあたる。成虫の発生後は産卵と幼虫が見られるため、幼虫の食害痕や虫糞を目安に早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。</p>

※オオタバコガのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【野菜全般】

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
アブラムシ類	—	平年並	<p>○6月下旬現在、巡回ほ場における発生量はやや多い。</p> <p>○向こう一か月の気温は高い見込みである。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。</p>
ハダニ類	—	やや多い	<p>○6月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並からやや多い。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避けローテーション散布を行う。</p>
ハスモンヨトウ	—	平年並	<p>○6月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○6月下旬現在、夏秋ナスほ場のフェロモントラップ(甲府市、笛吹市)誘殺数は平年並からやや少ない。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。</p> <p>□作業の際にはほ場内をよく観察し、卵塊やふ化後分散する前の若齢幼虫を見つけ次第捕殺する。</p> <p>□老齢幼虫には薬剤の効果が高いので、発生初期の防除に基準をおく。</p>
アザミヤカ類	—	平年並	<p>○6月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並か少ない見込みである。</p> <p>□発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。</p> <p>□施設では侵入防止のため施設開口部に防虫ネットを設置する。</p> <p>□ほ場周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。</p>

※オオタバコガ、ハスモンヨトウ、コナガのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

【稲】

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
いもち病 (葉いもち)	—	平年並	<p>○6月下旬現在、定点調査ほ場（中北・峡南・富士東部地域）における発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並から少ない見込みである。</p> <p>□冷水灌がい田、日照不足田、窒素過多田及び隣接ほ場に発生が認められた水田などでは予防散布を行う。</p> <p>□コシヒカリなどのり病しやすい品種では、早期発見に努め、病斑を認めたら直ちに薬剤散布を行う。</p> <p>□アメダスデータを用いた葉いもち発生予測モデル「BLASTAM」による感染好適日の出現から7～10日後にいもち病の発生が予想されるため、状況に応じて防除を行う。</p>

※水稻葉いもち発生予測モデル「BLASTAM」の結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/blastam.html>

水稻いもち病の定点調査の結果

https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/sakumotu_kekka.html

【稲】

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
イトヨリ	—	平年並	<p>○6月下旬現在、定点調査ほ場（中北・峡南・富士東部地域）における発生量は平年並である。</p> <p>□高冷地及び盆地周辺の山付き地域では、発生が多くなるので注意する。</p> <p>□窒素過多にならないように、追肥には十分注意する。</p> <p>□25株当たり12.5～20卵塊が認められたら薬剤散布を行う。</p>
ツマグロヨコバイ	平年並	平年並	<p>○昨年の発生量は平年並であった。</p> <p>□成虫及び老齢幼虫が、株あたり30頭程度寄生している場合は、直ちに薬剤散布を行う。</p>
ウンカ類	平年並	平年並	<p>○気象予報データを用いたウンカ飛来予測システムでは、飛来予測回数は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の気温は高い見込みである。</p> <p>□特にトビイロウンカについては、稲の株元をよく観察し、1株あたり3頭以上の寄生数を目安に、幼虫のふ化が終わる時期を見はからって薬剤散布を行う。</p>
斑点米カメムシ類 （ クモリカメムシ アカヒゲホソミドリカスミカメ ホソハリカメムシ アスジカスミカメ ）	平年並	やや多い	<p>○向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並から少ない見込みである。</p> <p>○昨年の発生量は一部のは場や早生品種などでやや多かった。</p> <p>○近年、冬季の温暖化や夏季の高温少雨で発生が多くみられる。</p> <p>□畦畔の除草を徹底する。ただし、出穂10日前以降の畦畔及び水田周辺の除草は、水田内への斑点米カメムシ類の侵入を助長する恐れがあるので行わない。</p> <p>□水田内で水稻出穂前に結実するヒエの穂、イヌホタルイの小穂は斑点米カメムシ類の誘引源、発生源となるため、結実前に除草する。</p> <p>□発生状況に十分注意し、発生が認められた場合は、穂揃期と乳熟初期（穂揃期7～10日後）の2回防除を基本として薬剤散布を行う。粒剤の場合、1回目の散布を出穂期～穂揃期に行う。</p>

【樹木類】

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
アメリカシロヒトリ	—	平年並	<p>○6月下旬現在、県内各地の発生量は平年並である。</p> <p>○向こう1か月の降水量は平年並みか少ない見込みである。</p> <p>□巣網は見つけ次第取り除いて捕殺し、薬剤散布を行う。</p> <p>□発見が遅れると被害が増加し、薬剤効果も低下するため、早期発見・早期防除に努める。</p> <p>□公園、街路樹等における防除にあたっては捕殺を優先し、やむをえず薬剤散布を行う場合は、飛散防止対策を徹底する。</p>

※アメリカシロヒトリのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/ameshiro.html>

III 各病害虫対策

【立木果樹類のハダニ類対策について】

- (1) 高温乾燥が続く時や梅雨明け後は急激に発生が増えるので、発生初期の防除を徹底する。
- (2) 防除にあたっては、薬剤抵抗性の発達を防ぐため同一系統の殺ダニ剤の連用は避ける。

【立木果樹類のウメシロカイガラムシ類の防除対策について】

- (1) モモ、ネクタリン、スモモにおいて、ウメシロカイガラムシの多い園では、収穫が終えている品種でも7月上旬～中旬にコルト顆粒水和剤 3,000 倍で防除を行う。
- (2) オウトウでは、7月上旬～中旬にスプラサイド水和剤 1,500 倍またはダイアジノン水和剤 34 1,000 倍で防除を行う。ウメでも同様に多い場合は、スプラサイド乳剤 40 1,500 倍またはアプロードエースフロアブル 1,000 倍で防除を行う。

【オウトウの収穫後の対策】

(褐色せん孔病、ハダニ類)

- (1) 収穫直後から薬剤防除を徹底し、葉の保護につとめる。
- (2) 防除薬剤は果樹防除暦または県病害虫防除基準を参考にする。

【トマト黄化葉巻病、トマト黄化病の原因ウイルスを媒介する コナジラミ類の防除対策について】

- (1) トマト黄化葉巻病、トマト黄化病はコナジラミ類がウイルスを媒介して引き起こされる。タバココナジラミは両者を、オンシツコナジラミは後者のウイルスを媒介する。
- (2) 半促成栽培終了後、残渣は完全に枯らして、付着したコナジラミ類を死滅させてから片付けを行う。
- (3) 施設を10日以上密閉し、高温による蒸し込みを行い、コナジラミ類を死滅させ、次作に持ち込まないように徹底する。

詳細については令和4年度病害虫防除所情報第3号「施設栽培トマトの黄化葉巻病対策について（半促成栽培終了後の対策）」を参考にする。

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/documents/220629bou.josyo.jyouhou3gou.pdf>

【施設栽培作物収穫後の対策】

(半促成トマト萎ちょう病、半促成キュウリつる割病、イチゴ萎黄病、土壌線虫等)

- (1) トマト、キュウリ、イチゴ等施設栽培作物収穫後の根、株、茎、葉等は次作の土壌伝染性病害の発生原因になるので、早めに抜き取り焼却するか、施設から持ち出し処分する。
- (2) 前年発生の見られた施設では作付けを避け輪作を行う。
- (3) 土壌中に残存している病原菌や土壌線虫等を死滅させるため、土壌還元消毒や太陽熱消毒を行う。

【サツマイモ基腐病の対策】

近年、九州地域のサツマイモ産地において発生が確認され、被害地域の拡大が見られている。発病すると地際部から茎が枯れ、いもが腐敗する症状を引き起こすことにより、大幅な減収を生じる。本県での発生は確認されていないが、被害の蔓延を防ぐため、栽培期間中はほ場を通じて本病の早期発見に努め、発病株はほ場外に持ち出して適切に処分する。

本病の防除に関する詳細な技術対策については、農研機構のHPに掲載されている、以下のマニュアルを参考にする。

「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和3年度版）」
https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/stem_blight_and_storage_tuber_rot_of_sweetpotator03.pdf

IV その他

【農薬危害防止運動について】

6月から9月は「農薬危害防止運動」実施期間です。農薬を使用するときは次の事項に注意して下さい。

- (1) 毒物又は劇物に該当する農薬だけでなく、すべての農薬について、安全な場所に施錠して保管するなど、保管管理には十分注意する。
- (2) 農薬の調製又は散布を行うときは、ゴム手袋、マスク等の防護装備を着用し、取扱を慎重に行う。
- (3) 農薬を散布するときは、事前に関係者に連絡し、隣接住宅等に被害を及ぼさないよう風向き等に十分注意する。

(参考) 住宅地等における農薬使用について

農林水産省ホームページ http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_tekisei/jutakuti/

- (4) 水田において農薬を使用するときは、止水に関する注意事項を遵守し、河川の汚染の防止等、環境の保全に努める。
- (5) 使用残りの調製液や散布器具を洗浄した水の、河川や水路等への直接排水は極力避けること。
- (6) 農薬やその希釈液、残渣等を飲食品の空容器等へ移替えしない。
- (7) 農薬の空容器、空袋等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託する等、適切に行う。
 - ・農薬使用者自身で、許可を受けた廃棄物処理業者に処理を委託する。
 - ・JA等、地域共同で適正に回収処分する体制が確立しているところでは、当該システムにより処分する。

連 絡 先

山梨県病虫害防除所（山梨県総合農業技術センター調査部）

TEL 0551-28-2941

Eメール byogaichu@pref.yamanashi.lg.jp

インターネット

山梨県病虫害防除所ホームページ

予報対象作物を中心に「トラップ調査結果」「病虫害写真」等を掲載しています。

アドレス <https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/>